

原 著 論 文

糖尿病合併妊婦と夫の妊娠期の協働 — 【夫婦の関係性の醸成】の局面に焦点をあてて—

Collaboration of Couple with Diabetes during Pregnancy: Focusing on the Aspect of Fostering the Couple's Relationship

西 内 舞 里 (Mari Nishiuchi)*
長 戸 和 子 (Kazuko Nagato)**

池 添 志 乃 (Shino Ikezoe)**

要 約

本研究は、糖尿病合併妊婦と夫の妊娠期の協働を明らかにし、看護支援の示唆を得ることを目的とする。糖尿病を持ちながら妊娠・出産した夫婦2組と妻6名を対象に半構成的面接を行い、質的帰納的に分析した。その結果、糖尿病合併妊婦と夫の妊娠期の協働として、【状況の認識】【家族を築いていく夫婦としてのあり様の方向付け】【夫婦の関係性の醸成】【責任を引き受ける姿勢の相互形成】【力を共にして創造し実践する活動】の5つの局面が見出された。

【夫婦の関係性の醸成】には、《夫婦の存在意義を認め合う》、《状況に応じて意識的にコミュニケーションパターンを変える》、《互いに相手を思いやる情緒的交流を育む》、《互いに理解を深め糖尿病と共に生活する夫婦の関わり方を創造する》、《内省しながら夫婦関係を深める》の5つのカテゴリーが含まれる。

糖尿病合併妊婦と夫の妊娠期の協働の特徴として、「察する」という日本の文化的行動を用いて夫婦の関係性を深めるという特徴が見出された。糖尿病管理を伴う妊娠期にある夫婦の出産へ向かう関係性と姿勢を高める支援の重要性が示唆された。

Abstract

This study aimed to clarify the state of collaboration by husbands with diabetic pregnant women during the gestation period to gain findings that could contribute to nursing support. Two couples and six wives who became pregnant and gave birth while having diabetes underwent semi-structured interviews and the content was qualitatively and inductively analyzed. Five aspects of collaboration by husbands of diabetic pregnant women during the gestation period were elicited from the results. These were [being aware of the situation], [direction as a couple creating a family], [fostering the couple's relationship], [mutual formation of a stance of accepting responsibility] and [activities for creating and executing strengths together]. [Fostering the couple's relationship] included the five categories of <<recognizing their significance as a couple together>>, <<consciously altering communication patterns in accordance with the situation>>, <<cultivating emotional interaction involving consideration for each other>>, <<creating involvement as a couple living together with diabetes with increased understanding>> and <<deepening the relationship as a couple while reflecting on it>>.

The Japanese cultural behavior of “perceiving” being used to deepen the couples' relationships was detected as a characteristic of collaboration by husbands with diabetic pregnant women during the gestation period. Results suggested the importance of support to help couples to focus their relationship and stance on the impending birth when the gestation period was accompanied by diabetes management.

キーワード：夫婦の協働 糖尿病合併妊婦 妊娠期 家族看護

*日本赤十字社 高知赤十字病院

**高知県立大学看護学部

I. は じ め に

近年、親意識の低下やそれに伴う虐待、育児放棄などの社会的問題の増加により、家族形成期にある家族への支援の必要性が高まっている。家族形成期は、家族ライフサイクルの基盤を培う時期であり、生活と関係性の変容に備える移行期である¹⁾。家族形成期の夫婦はそれぞれに親役割を獲得していく時期にあるが、妊娠、胎児に関する感覚が異なることから男女間で親への移行の仕方にズレが存在しており、後にこのズレは、妻の心から夫が引き離され、妻の心理的な孤立をもたらし、夫婦の伴侶性を低下させ、家族としてのつながりが弱まる原因となることが報告されている²⁾。このことから夫婦が妊娠・出産、育児に協働して取り組むことは、家族の基盤となる夫婦関係を良好にし、家族のつながりを強め、家族の発達を促進すると考えられる。出生児が健康問題や障害を持つ家族を対象とした研究は多いが、親となる両親が健康問題を抱えた状態にある家族や妊娠期の夫婦を対象にした研究は少ない。

医療の高度化や疾病構造の変化に伴い、慢性疾患を持ちながら妊娠・出産を迎える女性は増加しており、正常な妊娠・出産を迎えることが困難な状況になることも多い。糖尿病を合併した妊娠は母体のみでなく、胎児、新生児にも影響を及ぼすため、妊娠全期にわたって厳重な管理が必要である³⁾。糖尿病合併妊娠・出産は、母となる女性が健康な状態で乗り越えられるかという問題と、健康な子どもを迎えられるかという2つの問題を生じる。さらに親への移行という発達の危機と状況的危機の2つの危機に直面する可能性がある。これは女性だけでなく、家族にとって大きな問題であり、健康問題を持ちながらの妊娠・出産に向けて夫婦が課題を共有し、共通の目標を持ち共に取り組んでいくこと、すなわち協働して取り組むことで、家族の良好な関係性の維持や夫婦双方に自信をもたらし、課題を乗り越えていく力となると考えられる。

協働に関する研究では、専門職と家族間の協働、多職種間の協働に関する研究は多いが、家族員間の協働に関する研究は見当たらない。家

族員間で協働することは、家族としての相互のつながりを強め、家族の発達を促進すると考える。特に核家族化が進み、家族力の脆弱化が指摘される現在、家族を1つのシステムとして捉え、家族員間の協働を明らかにし、家族への看護支援を見出すことは非常に重要な視点であり、意義があると考ええる。さらに妊娠期にある慢性疾患を持つ妻と夫が妊娠・出産に対してどのように協働して取り組んでいるのかを明らかにすることは、健康問題を抱えながら家族を形成していく家族への看護支援において重要である。家族の協働への看護支援は、健康問題を抱える家族が健康問題を抱えながらも家族なりの健康的な生活を営むことを促進すると考える。

II. 研 究 目 的

本研究の目的は、糖尿病合併妊婦と夫の妊娠期の協働を明らかにし、看護支援の示唆を得ることである。

III. 用 語 の 定 義

Barnard⁴⁾、Henneman E.Aら⁵⁾、坂井⁶⁾、堀田⁷⁾らの定義をもとに、以下のように用語を定義した。

「糖尿病合併妊婦と夫の妊娠期の協働」とは、妊娠することで生じる新たな健康問題とそれに伴って生じる課題を共有し、共通の目標を設定し、責任の相互付与を行い、関係性を進展させながら、共通目標の到達に向けて力を共にする活動を展開することである。

IV. 研 究 方 法

1. 研究デザイン

質的帰納的研究方法

2. 研究協力者

妊娠前に糖尿病を発症し、糖尿病を持ちながら妊娠・出産した夫婦あるいは妻。夫婦は社会制度上の婚姻関係にある夫婦に限定せず、対象者が夫婦として互いに捉えているカップルを対象とした。

3. データ収集方法

糖尿病合併妊婦と夫の妊娠期の協働の文献検討等を基に作成した半構成的インタビューガイドを用いて、同意の得られた研究協力者に面接を行った。インタビューにおいては、妻を対象とする場合には、夫婦全体を捉えるため、円環的質問を心掛け、データ収集を行った。夫婦を対象とする場合には、質問が一方に偏らないよう、夫婦に同じ様に質問し、発言を得るよう心がけた。また長期間経過している研究協力者に対しては、当時の経験を時間軸に沿って想起できるように面接を進め、数回にわたって面接を行うようにした。同意が得られた場合にICレコーダーでインタビュー内容を録音した。データ収集期間は、平成22年7月～11月であった。

4. データ分析方法

得られたデータから逐語録を作成し、糖尿病合併妊婦と夫の妊娠期の協働と考えられるデータを抽出した。類似したデータごとにコード化を行い、共通の意味を持つものをカテゴリー化し、糖尿病合併妊婦と夫の妊娠期の協働を明らかにした。コード化、カテゴリー化においては、常に元のデータに戻り、解釈が妥当であるか確認しながら進めた。

5. 倫理的配慮

本研究の実施にあたっては、高知女子大学倫理審査委員会の承認及び協力施設の承認を得た。研究協力者に対して、研究の目的、内容、研究への参加の自由、プライバシーの保護、協力の撤回の自由、研究結果の公表の際の匿名性について口頭、文書にて説明を行い、同意を得て実施した。

V. 結 果

1. 研究協力者の概要

夫婦2組と妻6名から同意を得て、インタビューを行った（表1）。妊娠がわかってからの経過年数は1年から16年であり、病名は8ケース共に1型糖尿病であった。

2. 糖尿病合併妊婦と夫の協働の分析結果

糖尿病合併妊婦と夫の妊娠期の協働として、【状況の認識】【家族を築いていく夫婦としてのあり様の方向付け】【夫婦の関係性の醸成】【責任を引き受ける姿勢の相互形成】【力を共にして創造し実践する活動】の5つの局面と27のカテゴリー、99のサブカテゴリーが抽出された。本稿では、【夫婦の関係性の醸成】について報告する。

以下、局面を【 】, カテゴリーを《 》、サブカテゴリーを〈 〉、対象者の言葉を「 」で示す。

【夫婦の関係性の醸成】とは、夫婦が共に《夫婦の存在意義を認め合（う）》い、《状況に応じて意識的にコミュニケーションパターンを変え（る）》ながら《互いに相手を思いやる情緒的交流を育（む）》み、《互いに理解を深め糖尿病と共に生活する夫婦の関わり方を創造（する）》し、《内省しながら夫婦関係を深める》ことであり、5つのカテゴリーと19のサブカテゴリーから構成される（表2）。

表1 研究協力者の概要

	年齢	対象	出産経験	発症時期	妊娠からの経過年数
Case1	夫30歳代 妻20歳代	妻	初	10歳代	2年
Case2	夫30歳代 妻30歳代	夫婦	初	20歳代	4年
Case3	夫40歳代 妻40歳代	妻	経	10歳代	16年
Case4	夫20歳代 妻20歳代	妻	初	10歳代	4年
Case5	夫40歳代 妻30歳代	夫婦	初	10歳未満	2年
Case6	夫30歳代 妻30歳代	妻	初	10歳代	1年
Case7	夫30歳代 妻30歳代	妻	初	10歳代	2年
Case8	夫40歳代 妻40歳代	妻	初	30歳代	7年

表2 【夫婦の関係性の醸成】

カテゴリー	サブカテゴリー
夫婦の存在意義を認め合う	糖尿病を持つ妻を普通に受け入れる
	子どもを産む立場にある妻の判断を尊重する
	夫に救われたという思いを根底に持って信頼を置く
	共に目標に向かっていく存在と認識する
状況に応じて意識的にコミュニケーションパターンを変える	互いに相手を察して細かいことを話さない
	互いを気遣い糖尿病管理の心配を話題にせず個々にとどめる
	自分の気持ちを生活の中で率直に伝える
	察し合う関係を保ちながら糖尿病管理に伴う重要事項を一番に相談する
互いに相手を思いやる情緒的交流を育む	互いへのいたわりを感じ取る
	感謝の気持ちを持つ
	対話を通して互いに気遣い合う
互いに理解を深め糖尿病と共に生活する夫婦の関わり方を創造する	相手の性格をつかむ
	自分の性格の特徴を自覚する
	相手に今以上の負担をかけないようにする
	いざという時に支える姿勢を持ちあえてつかず離れずの距離を保つ
	互いの気持ちを理解して嫌な気持ちになる行動をとらない
内省しながら夫婦関係を深める	夫がリードして妻を前向きにすることで夫婦の調和を図る
	これまでと変わらない夫婦関係を維持する
	夫婦間のトラブルで得た反省を糧により良い夫婦関係を築いていく

1) 《夫婦の存在意義を認め合う》

これは、夫として糖尿病を持つ妻を普通に受け入れ、子どもを産む立場にある妻の判断を尊重すると共に、妻として夫への信頼を置き、互いに目標に共に向かう存在と認識することであり、〈糖尿病を持つ妻を普通に受け入れる〉〈子どもを産む立場にある妻の判断を尊重する〉〈夫に救われたという思いを根底に持って信頼を置く〉〈共に目標に向かっていく存在と認識する〉という4つのサブカテゴリーから構成される。

〈糖尿病を持つ妻を普通に受け入れる〉とは、

糖尿病と上手に付き合っていくことを普通と捉え、妻を受け入れることである。「別に上手に付き合っているんだったらそれで構わないんじゃないかって。それを分かった上で構わないと言ってくれたので今に至るんですけどね。」(case 6) や「よく低血糖とかになったりするんで、ただただ、普通におったらいい、みたいな感じで言われました。」(case 2) などの語りから抽出された。

〈子どもを産む立場にある妻の判断を尊重する〉とは、妊娠継続の判断に関して子どもを産

む立場である妻の思いや考えを夫が尊重することである。「尊重するというか、産みたいのっていうことは言って。そんな感じになっていった。」(case 7) や「主人も最終判断はもう、任せるって。」(case 3) などの語りから抽出された。

〈夫に救われたという思いを根底に持って信頼を置く〉とは、妻が夫の判断や行動に救われたという思いを根底に夫を信じて頼りにすることである。「すごい頼もしくって、救われたんですね。根底にそれがあるから。」(case 8) などの語りから抽出された。

〈共に目標に向かっていく存在と認識する〉とは、一人で出産に向かうのではなく、夫婦と一緒に目標に向かって進む存在であると捉えることである。「やっぱり一緒にねえ、目標に向かって進んでいって。やっぱり一人じゃ無理だったと思うし。」(case 8) などの語りから抽出された。

2) 《状況に応じて意識的にコミュニケーションパターンを変える》

これは、互いに相手を察して糖尿病管理の心配を話題にせず個々にとどめたり、自分の気持ちを率直に伝えながら、夫婦にとって重要な事柄について話し合う機会を持つようにコミュニケーションパターンを使い分けることであり、〈互いに相手を察して細かいことを話さない〉〈互いを気遣い糖尿病管理の心配を話題にせず個々にとどめる〉〈自分の気持ちを生活の中で率直に伝える〉〈察し合う関係を保ちながら糖尿病管理に伴う重要事項を一番に相談する〉という4つのサブカテゴリーから構成される。

〈互いに相手を察して細かいことを話さない〉とは、普段の生活の中で相手の考えや気持ちを推し測り、細かいことを話題にしないことである。「細かいことはあんまり言わないですけど。旦那はあんまし、何にも言わんのです。ありがとうって時々言う位。そんなにしゃべらない。」(case 1) などの語りから抽出された。

〈互いを気遣い糖尿病管理の心配を話題にせず個々にとどめる〉とは、互いに不安を増大させたり、気がかりにさせたりすることを口に出さず個々の胸の内に収めておくことである。「インスリン関係の情報は言ってくれていたけ

ど、奇形児が生まれやすいとかってというのは全然言ってくれなかった。そういう情報を持っていたけど、分けていたんだと。多分、気にするから変なことは言わないでおこうと思ったんじゃないかなと思うんですけど。」(case 1) などの語りから抽出された。

〈自分の気持ちを生活の中で率直に伝える〉とは、口に出さないと伝わらないという考えを持ち、日常会話の中で気持ちを相手にありのまま伝えることである。「2人の中で何かそれと言ってくれないと分からないのよっていうことを、口にしないとわからないよっていうことは言いますね。」(case 6) などの語りから抽出された。

〈察し合う関係を保ちながら糖尿病管理に伴う重要事項を一番に相談する〉とは、普段の生活の中で相手の考えや気持ちを推し測る関係を維持しながら、夫婦にとって糖尿病合併妊娠に伴う重要な事については話し合う機会を持ち意見を出し合うことである。「(入院治療を受けることに関して) まず旦那に相談して、こっちにしようっていうことを決めて行くようにしようかと思っているんだけどって相談して。」(case 7) などの語りから抽出された。

3) 《互いに相手を思いやる情緒的交流を育む》

これは、自分に対する相手のいたわりを感じ取り、感謝の気持ちを持って、対話を通して互いに気遣い合うことであり、〈互いへのいたわりを感じ取る〉〈感謝の気持ちを持つ〉〈対話を通して互いに気遣い合う〉という3つのサブカテゴリーから構成される。

〈互いへのいたわりを感じ取る〉とは、互いへの気遣う行動や言葉がけから相手のいたわりを実感することである。「私が結構、疲れているって思ってくれているのかもしれないですね。できるフォローはしてくれているのはもう、重々分かるので。」(case 6) などの語りから抽出された。

〈感謝の気持ちを持つ〉とは、夫の気遣いに対してありがたいと感謝の気持ちを持つことである。「(夫に対して) ありがたいですね。それがあるからやっぱり、やれているんでしょうねえ。」(case 8) などの語りから抽出された。

〈対話を通して互いに気遣い合う〉とは、相

手への心配を言語化して伝え、気遣い合うことである。「体のことは妊娠しなくっても心配しているような感じはあるんですけど、妊娠すると余計病気になるから先に逝っちゃうっていうのがあるんですかね。いつも（夫が）言っていますね。」(case 4) などの語りから抽出された。

4) 《互いに理解を深め糖尿病と共に生活する夫婦の関わり方を創造する》

これは、糖尿病管理をしながら共に生活していく上での夫婦間の新しい関わり方を生み出すことであり、〈相手の性格をつかむ〉〈自分の性格の特徴を自覚する〉〈相手に今以上の負担をかけないようにする〉〈いざという時に支える姿勢を持ちあえてつかず離れずの距離を保つ〉〈互いの気持ちを理解して嫌な気持ちになる行動をとらない〉という5つのサブカテゴリーから構成される。

〈相手の性格をつかむ〉とは、日々の関わりから相手の性格を捉えることである。「(妻) 何でも自分がやらないと気が済まないというようなところがあるんで。私の性格上、言われてやるのは嫌なんですよ。」「(夫) なんとなく段々、分かったんじゃないかと思うんですけどね。」(case 5) などの語りから抽出された。

〈自分の性格の特徴を自覚する〉とは、自分の性格を行動や人との関わり方から捉えることである。「何かやらないといかんとしたら、それやらないと気が済まないタイプなんです。絶対やると思ったら、ずっとしてましたね。」(case 1) などの語りから抽出された。

〈相手に今以上の負担をかけないようにする〉とは、自分に対する相手のいたわりを実感したり、相手の性格を踏まえて、負担や迷惑をできるだけかけないように行動することである。「心配かけるのが嫌だから、心配かけないようにしようかなと思って、行くなら一緒に行くかみたいな感じで。低血糖にならんように、事故をしないように、(夫) 気をつけようっていう。」(case 2) などの語りから抽出された。

〈いざという時に支える姿勢を持ちあえてつかず離れずの距離を保つ〉とは、お互いの性格を考え、あえて口出しすることなく距離を保ち、大事がないように見守る姿勢を持つことである。「何か大事がないように気をつけとかないとい

けないという。ちょっと距離を置いて見とくというか。」(case 5) などの語りから抽出された。

〈互いの気持ちを理解して嫌な気持ちになる行動をとらない〉とは、相手の気持ちを考え、互いに嫌な気持ちになる行動をとらないことである。「お互い嫌な気持ちになるんだったら、最初から大丈夫かって一言声かけて、大丈夫って返ってきたら、もうそれ以上は言わない。」(case 3) などの語りから抽出された。

5) 《内省しながら夫婦関係を深める》

これは、夫婦間の関わりや互いの気持ちを深く省みて夫婦関係をより良いものにしていくことであり、〈夫がリードして妻を前向きにすることで夫婦の調和を図る〉〈これまでと変わらない夫婦関係を維持する〉〈夫婦間のトラブルで得た反省を糧により良い夫婦関係を築いていく〉という3つのサブカテゴリーから構成される。

〈夫がリードして妻を前向きにすることで夫婦の調和を図る〉とは、妻のマイナス思考を夫が前向きな姿勢で引き上げることで夫婦として前向きな姿勢を持ち、気持ちの調和を図ることである。「性格的にねえ、前向きは前向きなので、こちらが落ち込んでいたら引き上げてくれるっていうそういうバランスでいっていたので、一緒に取り組んでくれるっていう感じではないですけど。」(case 8) などの語りから抽出された。

〈これまでと変わらない夫婦関係を維持する〉とは、夫婦の中で関係性を変えずに維持していくことである。「基本的にね、元々そういう主人やったので、あんまり夫婦の中で何かが変わったとかっていうことはないです。」(case 6) などの語りから抽出された。

〈夫婦間のトラブルで得た反省を糧により良い夫婦関係を築いていく〉とは、夫婦間の衝突で得た反省を今後の夫婦関係に役立てて積み重ねていくことである。「常に振り返って悪かったこととか反省して、何かトラブルがあって、そのままにしておくよりも次の時に役に立てるように、自分はお互いにやっぱり勉強だと思うんで、何にしても。」(case 5) などの語りから抽出された。

VI. 考 察

本研究の結果から導かれた糖尿病合併妊婦と夫の妊娠期の協働の特徴のひとつとして、日本の文化を背景とした関係性の醸成があると考えられた。ここでは、この特徴について考察し、看護への示唆を論じる。

1) 日本の文化を背景とした関係性の醸成

糖尿病合併妊婦と夫は、互いを信頼し、相手の存在意義を認めながら共に進んでいく存在と認識していた。さらに相手への理解を深め、情緒的交流を育み、夫婦間のトラブルを内省しながら関係性を築いていることが明らかになった。健全な家族関係として、父母の連合は重要である。男性と女性がパートナーとして、親として互いに支え合い、情緒的な絆で結ばれ、相互性と相互補完性に基づいた関係が健康的であると考えられている⁸⁾。本研究でも、糖尿病を持ちながら夫婦として健康的な家族の基盤となる夫婦関係を創っている様相が抽出された。

家族心理学では、結婚後の夫婦の発達課題として、夫婦としてのアイデンティティの確立をあげ、野末は「日々の生活の中で葛藤と和解を繰り返しながら徐々に親密性を高め『私たちは夫婦である』という感覚を身につけ共有することである。」と述べている⁹⁾。さらに、Timmermanは、個人における関係性の質は、それぞれに対して相互の信頼の感覚と感情的な密接を持っている必要があると述べ、親密性を「お互いに感情や考えをオープンなコミュニケーションで表出できること」と定義している¹⁰⁾。本研究においても夫婦が互いを信頼し、情緒的交流を育む、共に目標に向かって進んでいく存在と認識するというカテゴリーが抽出された。子どもが生まれ、家族としてのアイデンティティを獲得していく夫婦としての基盤を形成していると考えられる。ゆえに、時の経過と共に関係性を進行させ、新しさを加えていくという「夫婦の関係性の進展」ではなく、夫婦が互いに相手への理解を深めて支え合い、情緒的な絆を深めていると考え、【夫婦の関係性の醸成】と捉えた。これは既存の研究では見られなかった糖尿病合併妊婦と夫の協働における夫婦の関係性の特徴であ

ると言える。

夫婦が関係性を形成していく上で、コミュニケーションは重要である。ストラウスらは、慢性疾患を持つ夫婦について、「自分の気持ちを相手に伝えないことは夫婦関係の崩壊に寄与する。」と論じている¹¹⁾。本研究においても、夫婦が糖尿病管理を含めた生活の中で互いに相手を思いやる情緒的交流を育む方法として率直に自分の気持ちを言語化して伝えていく方法を駆使していることが明らかになった。稲垣らは糖尿病患者が話し合いの実感をもつことによって家族と共に療養生活を送っているという意識が生まれることを明らかにしている¹²⁾。糖尿病合併妊婦と夫においても、厳しい糖尿病管理を伴う妊娠生活の中で意識的に気持ちを言語化して交流することで、共に目標に向かって進む存在と認識し、新たな関係性を築いていると考えられる。

一方、本研究において、夫婦が互いに相手の気持ちや考えを推し測りながら行動を取るという「察する」コミュニケーションパターンが明らかになった。坂田は「察し」について、「日本の伝統的なコミュニケーションのあり方で、非言語的メッセージを介して相手を理解しようとすることであり、これは相手に『合わせる』ことによって可能になる。」と述べ、日本人の行動様式の特徴であり、察するためには受け手の方に発信者の意思を正確に受け取ること、つまり相手を『思いやる』ことが欠かせないと述べている¹³⁾。夫婦として、常に相手の行動や態度を思いやり、理解することを繰り返し、自分の関わり方を変容させる行動を取っていると言える。これらの行動は、夫婦間の日々のやりとりの中で対立や関係性の悪化を回避するよう、相手に合わせる行動と捉えることができる。これは、「察する」という日本の文化を背景に持つ夫婦特有の方法であり、【夫婦の関係性の醸成】の特徴と考えられる。また、家族発達課題として、互いの相違や葛藤を調整する適切な方法を発達させていくことが夫婦関係の確立に重要であると言われている¹⁴⁾ように、夫婦の相違や葛藤を調整する方法としても、日々の関わりの中で夫婦固有のコミュニケーションパターンを形成し駆使することで夫婦関係を深めている

と考えられる。その中で「察する」という日本の文化的な行動様式が用いられているのである。常に察するのではなく、日常の中でオープンにすること、しないことを場に応じて使い分け、夫婦の関係性を深めていると言えよう。どのように分別してコミュニケーションパターンや行動を駆使しているかは見いだせなかったが、組織間の協働では見られない夫婦の協働における特徴的な一面であると考えられる。

以上のように、糖尿病管理への夫婦の関わり方そのものが夫婦の関係性に関連していた。相手のいたわりを実感したり、相手の性格や気持ちを考え、生み出される夫婦間の関わり方が糖尿病管理を共にする日々の関わり方となっていると考えられる。特に家族形成期にある糖尿病合併妊婦と夫は、夫婦間の違いや葛藤を通して新たなルールや生活習慣、考え方を作っていく時期であり、互いに折り合い譲歩することを学んでいる。さらに内省することで新たな学びを得、互いに糖尿病と共に生活していく関わり方を創出しながら関係性を深めている。これは糖尿病合併妊婦と夫の協働における関係の特徴であると考えられる。

2) 看護への示唆

妊娠期において、医療者は病者である妻との関わりは多いが、夫婦として関わる機会が少なく、家族として夫婦が抱えている困難さや悩みを理解することが難しいことは課題である。夫婦間では、夫は妻の妊娠による身体的変化を見ているものの、妊娠を自分のこととして捉えにくい傾向にあり、妊娠の喜びだけでなく不安や苦労も妻と共有しようとする夫は少なく、妊娠期は夫婦間のズレが生じやすい⁴⁾。厳しい糖尿病管理を伴う妊娠期の生活に夫婦で取り組む姿勢を高め合うことで夫婦の関係が醸成され、夫婦の協働が強化されるよう、「出産へ向かう関係性と姿勢を高める支援」は重要である。

本研究結果から、糖尿病合併妊婦と夫は日本特有の「察する」という行動様式を含む様々なコミュニケーションパターンを駆使していることが明らかになった。また、厳しい管理を行う中で、安らぐ時間を共有し、心を安定させ、心理的な負担を軽減する活動を行っていた。これ

らの夫婦の活動は、相手を察する行動と考えられ、オープンにされないまま、進められていくこともあろう。夫婦間にズレがないかを把握すると共に、互いに相手の気持ちを思いやっている行動、夫婦にとって意味のある活動であると肯定的に意味付ける支援が重要であると考ええる。この支援によって、夫婦が共に出産へ向かう姿勢が高められ、関係性を醸成し、力を共にする活動を促進することにつながると言えよう。

また、日々の生活の中でオープンなコミュニケーションを促すことで互いを理解し、感情的交流を促進し、関係性を悪化させることなく、力を共にする活動を展開できると考えられる。よって、夫婦がどのように話し合い、どのようなパターンを用いて会話し関係性が形成されているかを把握し、必要なコミュニケーション方法の活用を促す支援は、協働を強化する上で重要であると考えられる。

3) 研究の限界と今後の課題

本研究の限界として、データ収集に関する限界、研究協力者に関する限界があげられる。

本研究の協力者は、糖尿病を持ちながら妊娠・出産した夫婦あるいは妻であり、夫婦間で相手の意見に影響される部分や、夫婦間では共有されず個々にとどめている部分を引き出せなかった可能性がある。加えて、研究者の面接技術が未熟であること、研究者の存在自体が協力者に影響することが考えられる。

また、本研究の協力者は糖尿病合併妊娠を経験した家族であり、出産後1年以上経過している。さらに、妊娠からの経過年数にばらつきがあり、結果への影響は否めない。

対象となる夫婦は妊娠期に経過が比較的安定し、協働されていた夫婦であったことから、夫婦の協働が困難なケースや状況的危機に直面したケースにおける協働は明らかにできなかった。今後の課題として、夫婦の協働が困難な場合や状況的危機に直面した夫婦においても今回の研究と同様の協働が見出されるかを明らかにすること、さらに、近年増加している妊娠糖尿病の夫婦へのケアに関する研究を進めていく必要があると考えられる。

＜引用文献＞

- 1) 山崎あけみ：初めての家族員を迎える妊娠
期にレディネスを育む家族看護、家族看護、
6(1)、33-39、2008.
- 2) 新井陽子：カルガリー家族アセスメントモ
デルを軸にした家族のつながりへのケア、
家族看護、6(1)、40-45、2008.
- 3) 工藤美樹：妊産婦と褥婦への看護と支援
糖尿病合併妊娠、周産期医学、36(5)、571-
573、2006.
- 4) 村上武文：社会システムの概念枠組みの一
考察 バーナードの共同システムと組織の
概念枠組みについて、広島経済大学経済研
究論集、12(2)、77-103、1989.
- 5) Henneman, A, LEE J.L, COHEN JI: Collaboration:
a concept analysis, Journal of Advanced Nursing,
21巻、103-108、1995.
- 6) 坂井宏介：政府・非営利組織間の協働関係：
その理論的考察、九州大学法学、91巻、45-
59、2005.
- 7) 堀田哲一郎：組織間関係の概念定義に関す
る考察 ―「調整」・「協同」・「協働」
の差異を中心に―、広島大学教育学部紀要
第一部、47巻、121-126、1998.
- 8) 野嶋佐由美：家族エンパワーメントをもた
らす看護実践、へるす出版、85-135、2005
- 9) 野末武義、中釜洋子、布柴靖枝他：家族心
理学 家族システムの発達と臨床的援助、
有斐閣ブックス、61-96、2008.
- 10) Timmerman GM: A concept analysis of intimacy,
Issues In Mental Health Nursing、12(1)、19-
30、1991.
- 11) Strauss A.L., Corbin J., Fagerhaugh S. 他：
CHRONIC ILLNESS AND THE QUALITY OF LIFE：
1984、南裕子、木下康仁、野嶋佐由美訳、
慢性疾患を生きるケアとクオリティ・ライ
フの接点、132-146、1987.
- 12) 稲垣美智子、浜井則子、南理絵他：糖尿病
患者における療養行動の構造、金沢大学医
学保健紀要、24巻、111-118、2000.
- 13) 坂田三允：日本人の生活と看護、第1版、
中央法規出版株式会社、16-61、1998.
- 14) フリードマン.M.M: FAMILY NURSING Theory
and Assessment、1986、野嶋佐由美訳、家

族看護学 理論とアセスメント、第1版、
79-110、へるす出版、1998.

＜参考文献＞

- ・赤城恵子：夫婦のパートナーシップ 不妊状
態の夫婦の実例から考える、メンタヘルスの
社会学、11巻、19-22、2005.
- ・コービン. J、ストラウス.A: THE CHRONIC
ILLNESS TRAJECTORY FRAMEWORK、1992、黒江
ゆり子、市橋景子、寶田穂詠、慢性疾患の病
みの軌跡 コービンとストラウスによる看護
モデル、1-31、医学書院、1995.
- ・藤原文雄：学校経営における「協働」理論の
軌跡と課題(1) ―高野桂一の「協働」論の検
討―、東京大学大学院教育研究科教育行政学
研究室紀要、18巻、113-123、1999.
- ・福井トシ子：女性のライフサイクルからみた、
糖尿病を持つ女性の理解、助産婦雑誌、56
(10)、802-806、2002.
- ・福井トシ子：糖尿病妊婦の周産期ケア 女性
のライフサイクルを通じた支援 (第1章妊娠
と糖尿病1. 女性のライフサイクルと糖尿病)、
第1版、メディカ出版、2-88、2005.
- ・福井トシ子：ライフサイクルという視点から
糖尿病の女性の妊娠・分娩・産褥期を支援す
る、糖尿病と妊娠、7(1)、102-107、2007.
- ・Gallant M.H., BEAULIEC M.C., CARNEVALE F.A. :
Partnership: an analysis of the concept within
the nurse-client relationship, Journal of
Advanced Nursing, 40(2)、149-157、2002.
- ・Gottlieb N L, Feeley N. Dalton C: The Collaborative
Partnership Approach to Care A Delicate Balance、吉
本照子監訳、協働的パートナーシップによる
ケア 援助関係におけるバランス、20-45、
エルゼビアジャパン、2007.
- ・後藤祐一：戦略的協働の理論的枠組み、経済
学研究、58(4) 319-330、2009.
- ・早川千恵、稲垣美智子：2型糖尿病をもつ夫
婦の形態、金沢大学つるま保健学会誌、28(1)、
159-171、2004.
- ・池添志乃 (法橋尚宏) : 新しい家族看護学
―理論・実践・研究― (第1章 家族発達理
論)、第1版、メヂカルフレンド社、1-131、
2010.

- ・小島廣光：協働の窓モデル、経済学研究、55(4)、11-30、2006.
- ・Miller S, Nunnally W. E and Wackman B. D：Couple Communication I, 1979、野田雄三、竹内吉夫訳、カップルコミュニケーションー気づきと人間関係の心理学ー株式会社現代社、9-26、1989.
- ・三田村七福子：家族のつながりを支える看護者の姿勢、家族看護、6(1)、13-19、2008.
- ・森啓：「協働」の思想と体制、公人の友社、2-10、2003.
- ・西野美佐子、小室直子、須田みなみ他：子育て家族の親発達と子どもの社会化に関する研究ー夫婦のパートナーシップ形成との関連からー、感性福祉研究所年報、7巻、145-160、2006.
- ・野嶋佐由美：家族エンパワーメントをもたらす看護実践、へるす出版、1-15、2005.
- ・小田和美、田中克子、末原紀美代他：1型糖尿病女性の療養上の体験と工夫ー第2報育児期ー、糖尿病と妊娠、8(1)、120-125、2008.
- ・小野寺敦子：親になることにともなう夫婦関係の変化、発達心理学研究、16(1)、15-25、2005.
- ・佐藤奈保：乳幼児期の障害児を持つ両親の育児における協働感と相互協力の関連、千葉看護学会誌、14(2)、46-53、2008.
- ・関田真由美（福井トシ子）：糖尿病妊婦の周産期ケア 女性のライフサイクルを通じた支援（第2章ライフステージ別にみるケアの実際2．妊娠）、メディカ出版、90-179、2005.
- ・鈴木良美：コミュニティヘルスにおける協働（Collaboration I n Community Health）概念分析、日本看護科学学会誌、26(3)、41-48、2006.
- ・東海林麗花：夫婦間葛藤への対処における譲歩の機能：新婚女性によって語られた意味付け過程に焦点を当てて、発達心理学、17(1)、1-13、2006.
- ・東海林麗花：持続的関係における葛藤への意味付けの変化：新婚夫婦における反復的な夫婦間葛藤に焦点を当てて、発達心理学、20(3)、299-310、2009.
- ・高橋久子（福井トシ子）：糖尿病妊婦の周産期ケア 女性のライフサイクルを通じた支援（第2章ライフステージ別にみるケアの実際4．産後）、メディカ出版、90-179、2005.
- ・田中克子、小田和美、末原紀代美他：1型糖尿病女性の妊娠、出産を決意するまでの情報探索、糖尿病と妊娠、7(1)、146-153、2007.
- ・田中克子、小田和美、末原紀代美他：1型糖尿病女性の療養上の体験と工夫ー第1報妊娠期ー、糖尿病と妊娠、8(1)、115-119、2008.
- ・田中佳代、中嶋カツエ、堀大蔵他：1型糖尿病を持つ女性のリプロダクティブヘルスに関する問題の構造化ーリプロダクティブヘルスに関わる意識・知識・支援に関する因子ー、糖尿病と妊娠、6(1)、119-126、2006.
- ・渡辺裕子、鈴木和子、前原澄子他：第1子出生による家族の適応過程、千葉大学看護学部紀要、17巻、1-12、1995.
- ・山本理絵、諏訪きぬ、望月彰：父親と母親は育児を共同化できているか、発達、29(114)、11-18、2008.